

總理大臣
佐賀
秘

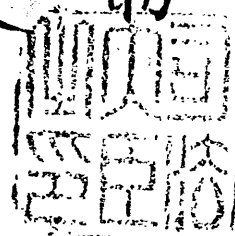
書
長
官

大正十三年十一月十三日

司法大臣横田千之助

内閣總理大臣子爵加藤高明殿

難波大助ニ對スル被告事件ニ付本日
大審院ニ於テ別紙ノ通判決相成候旨
大審院長ヨリ報告有之候條此段及報
告候也



判決書

山口縣熊毛郡周防村二百五

十七番屋敷無職

被告人 難波 大助

明治三十二年土月七日生

右刑法第七十三條ノ罪ニ関スル被告事件
審理ヲ遂ケ判決スルコト左ノ如シ

主文

被告人大助ヲ死刑ニ處ス

押收物中大正十二年押第一三一七號ノ二
ノ藥莖及同號ノ七ノ彈藥實包四箇ハ之
ヲ沒收ス

理由

被告人大助ハ歷史上由緒アル難波家ニ生
レ嘗テ縣會議員衆議院議員タリシ難波作
之進ノ四男ニシテ曾祖父輩庵ハ維新ノ際
王事ニ盡シタルノ故ヲ以テ特ニ先帝陛
下ニ拜謁ヲ賜ハリ歿後贈位ノ恩典ニ浴シ
被告人ノ父作之進モ亦皇室尊崇ノ念篤ク

被告人ハ嚴格ナル父ト慈愛深キ母トノ薰
陶ヲ受ケテ人ト成リ克ク父母ニ仕ヘ難波
家ノ傳統的精神ヲ體シ皇室中心主義ヲ奉
シ其ノ中學時代タル大正六七年頃ニ於テ
ハ書ヲ雜誌武俠世界ニ寄セ乃水將軍ノ死
後我國ノ上下浮華輕佻ニ流レ世界無比ノ
皇室ヲ奉戴スル我帝國ハ危殆ニ瀕スルモ
ノトシテ大ニ之ヲ慷慨シ大元帥陛下ノ
統帥シ給フ軍隊ニ入營スルヲ以テ臣民ノ
光榮ナリト爲シ微兵忌避者ヲ不忠ナリト

論シタルコトアリ又當時大阪朝日新聞力
皇室ノ尊嚴冒瀆ニ関スル記事ヲ掲載シタ
ル際同新聞ヲ攻撃シ父ト共ニ其ノ不讀不
買ヲ知人間ニ奔走勧誘シタルコトアリテ
臣民ノ大義ヲ守リ愆ル所ナカリシカ被告人ハ
曩ニ大正六年二月慈母ヲ失ヒ其ノ境遇ニ
變化ヲ来シタル爲若學自ラ立タンコトヲ
決意シ東京ニ走リタル以來東西各地ニ轉
學流寓シ再三上京シテ或ハ中學檢定試験
ニ志シ或ハ屢高等學校ノ入學試験ニ應シ

タルモ終ニ其ノ志ヲ得スシテ大正十年ニ
及ヘリ而シテ其ノ間父ヨリ支給セラル、
學資頗ル薄ク常ニ父ヨリ儉素ヲ旨トスヘ
キコトヲ命ヤラレ已ムコトヲ得スシテ自
炊ヲ爲シ又ハ新聞配達ニ從事シテ自給ヲ
計リ窮乏ヲ忍ヒ具サニ辛苦ヲ嘗メタル處
大正八年偶々四谷區谷町ノ陋隘ナル一室
ニ起居シテ通學ヲ爲スニ方リ親シク附近
ノ貧民窟ヲ目撃シ之ヲ自己ノ悲境ニ比シ
テ生活ノ艱難ヲ覺ユルニ從ヒ漸次思想ノ

變化ヲ来シタルニ際シ恰モ世界大戰ノ後
ヲ兼ケ露獨ノ帝政崩壊シソフ井エツト政府
ノ組織セラル、アリ又歐米民主主義ノ風
潮我國ニ瀰漫シ爲ニ被告人ノ精神ニ多大
ノ刺激ヲ與ヘ茲ニ我國建國ノ歴史ニ疑念
ヲ挾ミ皇室ニ對スル被告人從來ノ信念ニ
動搖ヲ生スルニ至レリ大正九年第四十二
帝國議會ノ開會セラル、ヤ當時被告人ハ
衆議院ノ傍聴席ニ在リテ其ノ混亂セル議
場ノ醜態ヲ親議員ニ對スル尊敬ノ念ヲ失

ヒ又普通選舉及對ノ演說ヲ聽キ我國ノ政
治家力頑迷ニシテ民衆ノ利害ニ意ヲ用キ
サルモノトシテ大ニ之ヲ憤慨シ痛ク議會
政策ノ非ナルヲ感シ同年五月歸省シタル
ニ時偶々總選舉ニ當リ確乎タル主義政見
ヲ有セサル父作之進カ單ニ家名ノ爲候補
ニ立テ巨額ノ冗費ヲ爲スコトヲ各マサル
ヲ見テ自己ニ對スル節儉ノ訓告ハ固ト是
レ一片ノ虚言ニ過キスト爲シ父ニ對シテ
大ナル反感ヲ懷キ越テ大正十年ニ至リ雜

誌改造解放社會主義ニ関スル著書露國ノ
小説等ヲ耽讀シ又社會主義的傾向ヲ有ス
ル朋友ニ交ルニ及ヒ社會主義的思想ハ漸
ク被告人ノ腦裏ニ浸潤スルニ至レリ當時
被告人ハ父ヨリ僅少ナル補給ヲ受ケ勉學
ノ傍再ヒ新聞配達ヲ業トシ父ノ代議士タ
ル地位ト自己ノ勞働者タル境遇トヲ對比
シテ益々反感ノ度ヲ高メ私有財産制及家
族制度ヲ呪詛シ又大正十年發賣禁止トナ
リタル雜誌改造ノ四月號ニ掲載セラレタ

ル断片ト題スル文章ヲ讀ミテ露國ノ「テロ
リス」トニ同情シテロリストノ行動痛烈ニ
シテ露國ノ革命ハ此等ノ徒ニ負ケ所甚ナ
カラストシテ大ニ之ニ共鳴シ尋テ同年四
月中幸徳事件ノ判決ヲ掲載シタル當時ノ
新聞ヲ讀ミ其ノ處罰ヲ殘忍ナリト爲シ深
ク幸徳等一派ノ者ノ心事ヲ憐ムト共ニ彼
等ト主義ヲ同クスル者ノ何等爲ス所ナク
屏息スルヲ以テ怯懦ナリトシテ大ニ之ヲ
憤慨シ決死ノ覺悟ヲ以テ自ラ暴力即時遂

行者タラントスルノ意ヲ決スルニ至レリ
其ノ後幾ハクモナク社會主義ノ講演會ニ
赴キタル際臨監察官力其ノ演說ヲ中止
シ片言隻句タモ幾セシメス即時解散ヲ命
シタルヲ見テ言論ノ自由ヲ與ヘサルコト
既ニ此ノ如シトセハ主義者力言論ニ訴フ
ルコトヲ爲サスシテ直接行動ノ手段ニ出
ルコトアリトスルモ是レ皆ナ官憲自ラ招
ク孽ニシテ其ノ責主義者ニ存スルニ非ス
ト思惟シ又從來躬ヲ實驗シタル勞働生活

ニ替フレハ現時ノ社會ハ多数窮民ヲ救済
スル施設ニ乏シキヲ以テ速ニ社會ノ状態
ヲ變革スルコトヲ努メサルヘカラスト爲
シ學生生活ヲ擲チ專心此ノ種ノ運動ニ從
事セントシタルニ父兄ヨリ痛切ナル訓戒
ヲ受ケ之ニ服シテ大正十一年四月以來早
稻田高等學院ニ入學シタルモ平生學課ヲ
怠リ好テ社會問題ノ講演會ニ出席聴講シ
傍ラ暴力社會主義者及無政府主義者ノ著
作ヲ耽讀シテ益々社會ノ變革ハ暴力ニ依

ルノ外ナシトノ信念ヲ鞏固ナラシメ其ノ
思想愈惡化スルニ及ビ被告人ハ断然其ノ
學生生活ヲ廢シ勞働者トナリテ下層生活
ヲ營ミ自ラ勞働者解放運動ノ一兵卒トナ
リ主義ノ爲奮闘スルノ意ヲ決シ大正十二
年二月退學シテ深川區富川町所在ノ木賃
宿ニ移リ下層ノ勞働ニ服シタルニ勞働ノ
辛苦生活ノ困憊深ク心肝ニ徹シ有産者ニ
對スル忿恚反抗ノ情ヲ激越ナラシメタリ
同年五月病ヲ得テ帰省シ父兄ノ言ニ服シ

テ足ラ生家ニ駐シタルモ被告人ノ思想却
テ一層ノ險惡ヲ加ヘ無自覺ナル勞働者ヲ
指導統率シテ多衆ノ團結ヲ組織シ政權ヲ
獲得シテ無産者獨裁ノ制ヲ採ルノ要アリ
ト爲シ終ニ共產主義ニ共鳴シ更ニマルク
スノ共產主義宣言ヲ熟讀スルニ及ビ益々
其ノ信念ヲ強フスルニ至レリ其ノ間屢々
東京ニ往來シ大正十二年九月ノ大震災ニ
際シ官憲ノ採レル措置ヲ快メセス速ニ徹
底シタル行動ニ出ルニ如カスト思惟シタ

ルニ方リ父ヨリ汝ノ主義ヲ棄テ父ノ命ス
ル所ト長兄ノ訓戒スル所ニ從テ行動スヘ
シトノ嚴訓ヲ受ケ被告人ノ進退ニ谷マ
リ遂ニ暴力遂行ノ計畫ヲ決然敢行セント
シ我國ノ列聖汎ク萬民ヲ愛撫シ給ヒ
皇恩四海ニ洽ク臣民亦等テ皇恩ヲ翼戴シ
苟モ帝國臣民タル者ハ其ノ地位階級ノ如
何ヲ問ハス均シク皇恩ニ浴スヘキモノナ
ルコトニ想到セス畏クモ皇室ト共產的思
想トハ両立スヘカラスト妄斷シ言論ニ依

皇朝御用

ルモ其ノ效果少ナシト爲シ皇族ニ對シ危
害ヲ加ヘテ共產主義者ノ決意ヲ示シ因テ
以テ一面ニ於テハ現時我國ニ於テ主義宣
傳ニ關シ言論ノ自由ヲ許サズ獎勵組合ヲ
モ公認セス銃劔ヲ以テ自由思想ニ對スル
權力階級者ト戰ヒ權力階級者及資本家カ
皇室ヲ奉擁シ獎勵者及社會運動者ニカフ
ル壓迫ヲ除去シテ無產者ノ危急ヲ防救ス
ハク他面ニ於テハ大震災ニ當リ無辜ノ勞
働者社會主義者ヲ殺戮シタル及動團體ノ

皇朝御用

皇朝御用

黒状ニ對シ其ノ反省ヲ促シ尙進ンテハ現
ニ我國ノ無産者間ニ澎湃タル皇意中心主義
ノ信念ヲ放擲セシメンコトヲ目的トシ同
志ニ圖ルコトナク獨リ其ノ事ニ當ルヲ
テ萬全ノ策ナリト爲シ其ノ機ヲ窺ヒ居リ
タル處同年十一月中父作之進ハ被告人ハ
心氣ヲ轉セシメンカ爲銃獵ヲ許スヤ被告
人ハ家ニ杖銃ノ在ルヲ憶ヒ之ヲ使用シテ
不逞ノ意思ヲ遂ケント欲シ同年十二月中
旬山口縣玖珂郡柳井町大字柳井津ニ友人

ヲ訪問シタル序次同所金物商宮本謙一方
ニ於テ第一番ノ大形散彈ヲ買求メ同月二
十二日其ノ散彈火藥ヲ填充シタル彈藥實
包五箇及杖銃ヲ携帶シ家ヲ出テ、京都ニ
下單シ同市ニ滞在中二十五日朝新聞ニ依
リ 皇太子殿下ノ同月二十七日帝國議
會開院式ニ行啓アラセラル、コトヲ知リ
殿下ニ對シテ危害ヲ加ヘンコトヲ決
意シ二十六日杖銃彈藥ヲ携帶シテ急遽京
都ヲ出發シ翌二十七日午前八時二十分東

京驛ニ到着シ同所ニ於テ杖銃ニ彈藥ヲ装
填シタル後芝區琴平町一番地地先西洋家
具商あめりか屋前ニ抵リ路傍拜觀者ノ群
ニ混シテ御通過ヲ待テ受ケ同日午前十時
四十分頃御召自動車ノ過クルヲ見テ驚
線ヲ突破シ畏クモ皇太子殿下ニ咫尺
シテ杖銃ヲ發射シ其ノ散彈自動車ノ窓硝
子ヲ破壊シテ車室内ニ飛散シタルモ
殿下ニハ恙アラセラレサリシモノナリ
仍テ證據ヲ按スルニ以上ノ犯罪事實ハ公

判ニ於テ被告人ノ自白スル所ニシテ尚左
記一乃至七ノ證據ヲ考覈シテ犯罪ノ證明
其ノ他犯罪ノ動機及原因ノ認定ヲ爲スニ
十分ナリ

一 皇太子殿下ノ御召自動車カ虎ノ門ヲ
過ル際一先漢アリテ御召自動車ニ近
ツキ杖銃ヲ發射シタルコトハ御召自動
車ノ運転手タリシ證人隈元一郎及第一
後駐自動車ノ運転手タリシ證人秋本貞
雄ノ各証言ニ依リ之ヲ認メ杖銃ノ

明治三十四年四月

明治三十四年四月

發射ニ因リ散彈ハ窓硝子ヲ貫キ御召自動車ノ車室内ニ散亂シ危險 皇太子殿下ニ逼リタルモ 殿下ニハ恙アラセラレサリシ事實ハ當時御陪乗ヲ爲シタル證人入江爲守ノ訊問調書及御召自動車檢證調書中御座席ノ右側硝子戸ニ縱約一寸四分横約一寸八分ノ不正円形ノ貫通孔アリ車室内天井ノ左後隅ニ偏シタル附近ニ五個所ノ示指頭大ノ彈痕アリトノ記載並ニ押第一三一七號ノ百四十

明治三十四年四月

乃至百四十六ノ硝子ノ破片粉末及彈丸ノ破片ニ依リ之ヲ認メ被告ノカゑめリハ屋前ノ拜觀者ノ群衆中ヨリ走り出テ杖銃ヲ發射シ直ニ警視廳巡查ノ爲逮捕セラレタルコトハゑめリハ屋前ノ警戒ノ任ニ當リタル警視廳巡查證人西璋ニ爲我井通次郎被告人ヲ逮捕シタル警視廳巡查證人松戸正衛及被告ノ使用ノ杖銃ヲ奪ヒタル補助憲兵證人竹花武夫ノ各訊問調書ニ依リ之ヲ認ム

裁判所

裁判所

裁判所
裁判所
裁判所

裁判所
裁判所
裁判所

ニ被告人カ押収ノ杖銃ニ押収ノ彈藥實包
ト同一ナル實彈ヲ籠ノ之ヲ發射シタル
コトハ前記證人竹花武夫ノ訊問調書及
大正十二年押第一三一七號ノ一ノ杖銃
同號ノ二ノ藥莢同號ノ七ノ彈藥實包ニ
依リ之ヲ認メ發射シタル散彈ハ大正十
二年十二月中旬被告人カ柳井津ノ宮本
謙一方ニ於テ買取リタル第三番大形ノ
モノナルコトハ被告人ノ所持シタル押
第一三一七號ノ六ノ殘存セル散彈ト證

甲 第四號

人梅田典一第三回及第三回訊問調書中
被告人カ宮本謙一方ニテ散彈ヲ買取リ
タル旨ノ供述記載並ニ證人宮本謙一ノ
訊問調書中押第一三一七號ノ六ノ散彈
ハ第三番大形ニシテ自分店ニテ販賣ス
ル所ノモノト同一ナリトノ供述記載ト
ニ依リ之ヲ認ム

三被告人カ大正十二年十二月二十五日頃
京都ニ於テ翌々二十七日 皇太子殿下
ノ議會行啓ノ際危害ヲ加ヘンコトヲ決

裁判所
裁判所
裁判所

裁判所
裁判所
裁判所

東京新聞

昭和十一年

意シタルコトハ被告人カ同年同月二十
六日京都圖書館ニ於テ認メタリト公判
ニ於テ供述スル新聞記者友人及弟謙亮
ニ宛タル大正十二年押第一三一七號ノ
十九乃至二十五同號ノ百九百三十五ノ
被告人發送ニ係ル九通ノ書狀ニ依リ之
ヲ認ム

四、被告人カ犯罪ノ決意ヲ爲スニ至リタル
動機ニ付テハ皇室ト共產主義トハ相面
立セスト思惟シ言論ノ壓迫ト戦ヒ及動

團體ノ反省ヲ促スト同時ニ権力階級及
資本家ノ壓迫ヲ除キ無産者ノ懷ケル皇
室中心主義ヲ放擲セシメシコトヲ目的
トシテ此等ノ者ノ奉戴スル皇族ニ危害
ヲ加ヘントスルニ在リタルコトハ被告
人ノ第五回訊問調書ニ其ノ旨ノ供述記
載アリ之ト照應スル前項所載ノ九通ノ
書狀及押第一三一七號ノ三十九、四十二、
百三十八ノ五ナル歌川克己ニ宛被告人
ノ發送シタル書狀ニ依リ之ヲ認ム

東京府警視廳
第一〇二號

東京府警視廳
第一〇二號

五、被告人カ大正十二年十月以來生家ニ在
リテ犯罪敢行ノ期ヲ窺ヒタルコトハ人
正十二年押第一三一七號ノ四十六、四十
八百三十八ノ二乃至五ノ歌川亮己死被
告人發送ノ書狀ニ依リ之ヲ認メ同年十
二月中杖銃ノ手ニ入リタルヲ以テ之ヲ
使用シテ皇族ニ危害ヲ加フル意思ヲ有
シ杖銃及彈藥實包ヲ携ヘ同月二十二日
郷里ヲ出發シタルコトハ證人宮本謙一
方ニテ散彈ヲ買入レタル前記徵憑事實

並に残存セル押第一三一七號ノ七彈藥實
包四個及之ヲ準備シテ杖銃ト共ニ携帶
シ京都ヲ經テ上京シ犯罪ヲ敢行シタリ
トノ公判ニ於ケル被告人ノ供述ニ依リ
之ヲ認ム

六、被告人カ當初皇室中心主義ヲ奉シタル
モ思想變化シテ社會主義者トナリ大正
十年四月暴カ即時遂行者トシテ立ツノ
決心ヲ爲シ最後ニ共產主義ヲ懷クニ至
レル顛末ハ被告人ノ第三回訊問調書ニ

用用用用用

基基基
半半半
所所所

依リ明ニシテ就中暴力即時遂行ノ決意ヲ爲シ又共產主義ノ思想ヲ有シタルコトハ敘上引用スル被告人發送ノ書狀及歌川克己第一回訊問調書中「テロリズムハ勞働運動ノ最前衛ナリト被告人ハ談シタルコトアリトノ供述記載アルニ依リ之ヲ認ム

七 被告人力中學時代ニ於テハ學資ノ給與薄クシテ常ニ生活ノ不安ヲ感シ終ニ父ニ對シ反感ヲ懷クニ至リ私有財産制及

甲 乙 丙 丁

家族制度ヲ呪ヒ其ノ極打開シ難キ窮狀

讀書ニ於テハ精細ナル供本記載及ニ

照應又押第三一七號、三十二乃至

三十八、四十一、四十四、四十五、百十七、友

人宛被告入發送ノ書状ニ依リ之ヲ認ム

本件ニ於ケル被告人犯行ノ経路ヲ案スル

被告人ハ其中學時代早ク既ニ慈母ヲ

失ヒ
度
ハ志ヲ立
テ家郷ヲ出
テタルモ事

志ト違ヒ學成ラスレテ勞働生活ニ沈淪ス

ルノ己ムヲ得サルニ及ヒ茲ニ其ノ思想ニ
動揺ヲ来タシ爾來其ノ孤立無援ノ悲境ト
四圍ノ事情トハ相待テ益々被告人ノ思想
ヲ惡化セシメ終ニ累シ 皇室ニ及ホスニ
至リタルモノニシテ被告人ノ環境ハ其ノ
犯罪ヲ生ムニ與テ力ナカリシモノト謂フ
コトヲ得ス又被告人ハ公判ノ最終ニ於テ
自己ノ行為ハ其ノ懷抱スル主義ノ為ニハ
仍正當ナリト思考スルモ 皇室ハ無產者
ニ對シ直接ニ壓迫ヲ為スニ非サルニ拘ラス

獨斷ヲ以テ一時タリト雖又單ニ手段ノ爲
ナリト雖皇室ヲ敵トシタルハ輕率タルヲ
究カレス共產主義者ハ必ラスシモ暴力ヲ
以テ直ニ革命ヲ實現セントスルモノニ非
ス言論思想ヲ以テ戰ハント欲シ唯タ權力
階級ノ挑戰ニ因リ己ムヲ得ス暴力ニ訴フ
ルモノニ過キス故ニ皇室ハ共產主義正面
ノ敵ニ非ス若夫レ權力階級ニシテ皇室ヲ
私シ之ヲ無產者ノ壓迫ニ利用スル力知キ
ニトアラシカ共產主義者ハ皇室ヲ敵ト爲

スニ至ルヘキモ畢竟共產主義者ノ希望ス
ル所ハ彼ノ英國ニ學ハントスルニ在リテ
決シテ露國ニ倣ハントスルモノニ非スト
陳述シタリ是被告人ノ犯罪動機ニ関スル
信念ニ付若干ノ反省ヲ傳ヘ稍懺悔ノ情ヲ
示スモノナリト謂フ可シ然レトモ被告人
ノ行爲ハ萬世一系ニシテ一視同仁ナル皇
室ヲ奉戴スル我國建國以來ノ光輝アル歷
史ニ拭フヘカラサル一大汚點ヲ印シタル
モノニシテ其ノ罪責極メテ重ク從テ叙上

ノ情狀アルモ其ノ罪責ヲ輕減スルニ足ラ
サルモノト認ム

法律ニ照スニ被告人ノ行爲ハ刑法第七十
三條ニ該當シ死刑ニ處スヘク押収ニ係ル
押第一三一七號ノ二ノ藥莖ハ犯罪ノ用ニ
供シタル物件同號ノ七ノ彈藥實包四個ハ
犯罪ノ用ニ供セントシタル物件ニシテ何
レモ被告人ノ所有ニ屬シ刑法第十九條ニ
依リ之ヲ沒收スヘキモノトス依テ主文ノ
如ク判決ス

検事小山松吉、検事矢追秀作、本件公判ニ
関與ス

大正十三年十一月十三日

大審院第一特別刑事部

裁判長 判事 横田秀雄

判事 豊島直通

判事 磯谷幸次郎

判事 松岡義正

判事 西川一男

甲 靜 岡 縣

供覽

從理天匠

法華經疏第二十九卷

大正十四年五月十九日

司法省刑務局長岡萬之助

司馬司馬

內閣書記官長江木翼殿

豫審終結決定書寫送付件

加藤首相ニ對シ危害ヲ謀リタル吉田音治郎外
ニ名ニ係ル爆發物取締罰則違反事件豫
審決定相成候ニ付別紙毎爲参考送付
候也